

特集

文教施設のインテリジエント化

二一世紀に向けた新たな学習環境の創造

文教施設整備の新たな展開に期待する

鈴木 勲 6

巻頭言

文教施設のインテリジエント化について

(出席者)石井威望／高野文雄／長倉康彦／谷口汎邦／(司会)佐川政夫

8

座談会

生涯学習における文教施設の役割について

長沢 悟 16

情報社会の進展と文教施設

月尾嘉男 20

エッセイ

時間と空間を越えて

水越敏行 24

事例紹介

特色ある文教施設個別型計画

岐阜県羽島郡川島町立川島中学校／横浜商科大学高等学校CAVセンター
／九州工業大学情報工学部飯塚キャンパス／群馬県生涯学習センター

26

特色ある文教施設複合型計画

東京都台東区立上野小学校／水戸芸術館／ブリタニアコミュニティセンター

38

地域学習環境計画

愛知県新城市／福島県田村郡三春町

47

資料

文教施設のインテリジエント化について(概要)

53

カラー

学校建築の今昔協町中学校

1

人間国宝登壇大野昭和齋

4

名作シリーズ昆虫写生帖

表紙 2

文化財紹介識名園

表紙 3

人への道青木昌彦

58

わがまちの教育文化④島根県仁摩町

59

私の選ぶ一冊

69

ことばの小箱かぼちゃ

70

鑑賞席手塚治虫展

71

科学のひろば宇宙科学研究所①

72

ふるさとのうた箱根八里

74

海外教育ニュース

76

郷土に生きる教育家群像⑥愛知県

78

刊行物紹介

82

読者からのたより

83

編集後記

84

手塚治虫——真のヒューマニスト

「手塚治虫展」

我が国が世界に誇るべき天才的マンガ家、いやむしろ「イメージ思想家」手塚治虫（一九二八—一九八九）の、これはワンマンショーである。

いうまでもなく、手塚治虫は戦後、無限の活力と創意によって、マンガを文化にまで高めた偉大なアーティストである。時代のさまざまな要求に敏感に反応しながらも、彼の作品にはつねに主張があり、主題があった。それこそ、人間存在に対する深い洞察に基づいた問いかけであった。人間とは何か。なぜ、愛し、憎しみ、かくもいとしく、かくも愚かなのか。彼は、その作品のすべてをあげて、この永遠の問いを彼自身と読者につきつけてやまなかったのである。彼はいかにも安易なハッピーエンドをきらった。自らの



「鉄腕アトム—マッド・マシンの巻」より

科学力によって破壊にひんした未来社会。哀しいまでに善良で、人間的なロボット。機械のように冷酷で好戦的な人間たち。……彼の描く世界は、意外なまでに絶望的である。しかしながら、その一方で、彼はつねに人間に対する信頼を失わず、最終的にニヒリズムを回避しつづけたのであった。手塚治虫、彼こそはまさに、言葉の真の意味でのヒューマニストであった。

この展覧会は、そうした手塚の世界を総合的に紹介すべく、約一五〇〇ページの原画を中心に構成される。マンガ愛好家はもとより、マンガに対する偏見をもつ人々には是非とも見ていただきたい展覧会である。

（東京国立近代美術館主任研究官 本江邦夫）

■会場 東京国立近代美術館（千代田区北の丸公園三）

■会期 七月二〇日（金）～九月二日（日） 午前一〇時～午後五時（入場は四時三〇分まで）

月曜休館 夜間開館（毎週金曜日午後八時まで（入場は七時三〇分まで））

■交通 地下鉄東西線竹橋駅下車 徒歩五分

特集 ● 芸術文化政策 の 推進

●巻頭言
真の文化国家をめざして

坂本朝一

●座談会
芸術文化の振興

(出席者)遠山一行／福原義春／永井多恵子
／(司会)渡辺通弘

●論文

芸術活動と国際交流

丹羽正明

これからの日中美術

桑原住雄

●施策紹介
芸術文化振興基金の発足

人々の道

阪田誠造

わがまちの教育・文化

静岡県清水市

ことばの小箱

野元菊雄

科学のひろば

宇宙科学研究所

ふるさとのうた

熊本県教育委員会

郷土に生きる教育家群像

神奈川県
神奈川県

編 集 後 記

▽今月号は、この三月に文部省の「文教施設のインテリジェント化調査研究協力者会議」から報告された、「文教施設のインテリジェント化―二一世紀に向けた新たな学習環境の創造―」を特集に取り上げました。

の要請を取り入れた、特色のある文教施設の事例を多く紹介するなどしております。それらをご覧いただき、夢のある文教施設が早く身近にできることを読者の皆様とともに期待したものです。

▽このテーマは、インテリジェント化された文教施設と接する機会が少ないこと、技術的な面を多く有することなどで、理解が難しく、また、具体的なイメージとして描くことも難しいのではないかと思います。

▽読者から、本誌を見たいときに見られなかった、というたよりをいただき大変恐縮しております。編集部では、身近な図書館、学校などで手軽にご覧になれるようにするため、関係機関に協力を求めています。

▽そこで、同報告書を中心にして座談会をもち、さらに新しい時代

▽このようなことが早く改善されることを願っております。
(S・K)

投稿歓迎

『読者からのたより』欄への投稿を歓迎します。本誌を読んでの感想、ご意見等をどしどしお寄せください。

●投稿規定

- ①一件につき四〇〇字以内
- ②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記(誌上匿名可)
- ③掲載分には薄謝進呈

※文章を一部手直しさせていただくことがあります。

●送り先

〒100 東京都千代田区霞が関三―二―二

文部省大臣官房政策課「文部時報」編集部

MESC 61 月刊

文部時報 7月号

第1362号

平成2年7月10日印刷
平成2年7月10日発行

●著作権所有——文部省◎

●発行所——株式会社 きょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7丁目4番12号
(営業所) 〒162 東京都新宿区西五軒町4-2
電話 03-268-2141(代表) 振替口座 東京9-161番

●印刷所——株式会社行政学会印刷所

定価500円(本体485円)(〒61円)
年間購読料6,000円(〒共)

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店をお願いします。

●本誌の掲載文のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。